

「ずいぶん久しぶりね」館長ははぐらかすように言った。
 「国際的協力委員会以来だ」彼はつぶやいた。「物事がもっと簡単な時代だった」
 「図書館の保護者の名前を聞いていたら、一週間も心配して過ごさなくてよかったのに。」視察がある^カと知^チつてから、長^{チヤウ}広^{コウ}舌^{ゼツ}を練^ネつてきたのよ」

「どんなことを言うつもりだったのかな？」彼はまだ、気をつけの姿勢で立っていた。
 「まあ、お茶をどうぞ」館長は椅子を指さした。

マーガレットが、お茶を取りにいった。わたしも席を外すべきだとわかってはいたが、あまりにも意外な成り行きに魅了されていた。

「図書館の保護者に、利用者のいない図書館は本の墓地だと言ってやるつもりだった」ミス・リーダーは言った。「本はひとつと同じ。連絡が途絶えると存在しなくなるの」

「まさにそのとおりです」彼は答えた。

「図書館を開けておかせてくれと、心からお願ひするつもりだった。あなたが来るなんて、思うはずないでしょう？」

「図書館を閉めるだなんて、わたしが許さない。それでも……」

「何かしら？」館長は促した。

「国立図書館に課せられた規則に、ここも従ってもらう。何冊かの本が、閲覧できないことになる」彼は書類鞆から一覧を取り出した。

「それらを処分しなければならぬのかしら？」ミス・リーダーは訊いた。

彼は館長を、驚いた顔で見返した。「何を言うんですか、閲覧してはいけないと言っただけです。プロの司書のあいだで、そんな質問をするなんて！ わたしたちのような人間は、本を処分したりはしない」

マーガレットがアールグレイのカップを持って戻ってきた。ベルガモットの柑橘系の香りが、希望とともに部屋に広がった。わたしたちのような人間。司書どうし、価値観の同じ者。最悪の事態は免れたと感じたのだろう、ミス・リーダーは震えるため息をついた。館長と図書館の保護者は二人が参加した会議や共通の知り合いについて思い出話をした——ああ、シカゴのアメリカ図書館協会の催しはおもしろかった。あの女性はもう引退したはず。あの男性は別の分館に移動して、前と同じではない。

ドクター・フックスは驚いて腕時計を見て、次の約束に遅れると言った。「会えてよかった」立ち上がりながら、彼は女性館長に言った。戸口で、会合が首尾よく終わって微笑みながら、彼はわたしたちを見た。わたしは何か、収蔵書についてのコメントか、愛想のいい挨拶が聞けるものと思っ^トた。「当然ながら」彼は言った。「あるひとたちは、もう入館できない」

チャネット・セスリン・チャルズ、高山祥子 江崎 ありあけ
 第の彼女たちへ 東京 創元社、二〇二〇年四月

「あれがオデイルの本の友か」と、レミー。「本当に、同じくらい本を読んでいるの？」
「わたし以上かもしれない」

「彼女、才能があるね」彼は言った。

「登場人物が生きているみたいに表現するのよね」

「いや、自分が登場人物になりきるんだ」彼はビッツィに歩み寄った。

わたしはそれを追いかけた。

「すばらしい」彼は言った。

「ありがとう」ビッツィは小声で言った。今は床を見つめている。

レミーをミスター・プライス・ジョンズやムッシュ・ド・ネルシアに紹介したくて、彼の袖を引つ張った。彼は気づかなかった。

「喉が渴いたでしょう」彼はビッツィに言った。「シトロン・プレッセでも、どう？」

レミーが女性を真剣に誘うのを見たのは初めてだった。少なくとも六人の級友が、レミーに会うのが目的でわたしに近づいてきた。女の子を紹介するたび、彼は礼儀正しく話を聞いたけれど、自分から誘うようなことは一度もなかった。

ビッツィが彼の誘いを受け入れますように。今日一回ぐらい、早めに仕事を切り上げてなんの問題もない。

ビッツィはレミーの肘に手をかけた。彼は瞬きよりも少し長く目を閉じていて、声に出さずにありがとうと言い、それから彼女をエスコートして外に出ていった。忘れられた気分になったが、レミーがビッツィに惹かれたのは自然なことだと自分に言い聞かせた。二人とも、わたしを置き去りにするつもりではなかった。

ボリスに背中を叩かれた。「いいニュースがある」彼は言った。「本を寄付することになった」

「悪いニュースは？」

「それが三百冊もあって、それを用意するのはきみの仕事だ」

ボリスから一覽を受け取った。題名を読んでいるあいだに、わたしは消沈した気分から立ち直った。レミーの来訪は、予想したような展開にはならなかった。また別の機会があるだろう。

「この図書館が何千冊もの本を大学に提供していると知って、感心したものよ。もちろん、荷造りするの自分だとわかる前だけ」わたしは冗談を言った。

ボリスは笑った。「わたしじゃなく、きみでよかった」

奥の部屋は空の輸送用木箱と雑多な本であふれていた。「無事に着いてね」わたしは一冊のハードカバーの本をイランのテヘランにあるアメリカン・カレッジ宛の木箱に入れながら言った。次の本はイタリアの水兵協会へ行く。三冊目、四冊目、そして五冊目は、ともにトルコへ旅する。何時間も働いた気になったが、時計を見たらまだ十分しか経っていなかった。果てしない、寂しい午後になりそうだった。

ドアを叩く音がした。「貸出デスクにいた男性にあなたの居場所を訊いたら、ここだと教えてくれたの」マーガレットが言った。

「連れができてうれしいわ。手伝ってもらえる？」わたしは言うてから、マーガレットのピンクのシルクのワンピースに気づいた。ここにいたら埃だらけになってしまうし、いずれにしても高級婦人服を着ている女性は働くものじゃない。

「もちろんよ。ほかにすることもないし」

わたしは彼女に娘を連れてくるように提案したが、クリステイナはエレンとその父親と一緒に楽しくしているとのことだった。わたしはマーガレットに、それぞれの本の目的地の見つけ方を教えた。彼女は木箱のあいだを優雅に行き来し、本を丁寧に荷造りしていった。「いってらっしゃい」

コリン・クラウチ著 近藤隆文訳「ポスト・デモクラシー — 格差
拡大の政策を生む政治構造」(青灯社, 2007年3月)

の立案に参加して自己の利益を図ることを無批判に容認する姿勢は、第2章でふれた、国家の側の自信と公権力や公共サービスの意味がともに崩れるという現象の例である。ここで思い起こしたいのは、公共サービスが前デモクラシー期の概念であることだ。公共サービスは多くの国で資本主義の最盛期に大きく発展したが、現在では、当時の資本主義は無制限だったと見られることが多い。逆説的になるが、資本主義の自由を求め、それがほかの価値観や利益と衝突する場面にたびたび出くわしたからこそ、十九世紀の改革者たちは、政治が実業界を腐敗させるのと同様に実業界は政治を腐敗させるというアダム・スミスの懸念を重く受け止めたのである。政治家と官僚はそれゆえ独自の倫理を必要とし、結果、実業界の人間とは異なる行動が求められた。そうした理想を守り通せないことは多々あり、そのため十九世紀後半は偽善的と見られることも多いが、そこに理想があったのは間違いない。公務に携わる人々は、実業界の権力集中を代表する人物には細心の注意を払って対応したはずである。また、各個人のいざく事業上の野心の総体より公共の利益が優先されることや、そうした野心がどんな事態を招くかをわきまえていることが期待された。この理念は君主の利益を優位に置く考え方から発展したものが、ブルジョワ資本主

義や、国家が外部の監督機関となる必要性に順応し、やがて国家を市民全体の下僕とする社会民主主義的理念において頂点に達した。

こうしたアプローチは資本主義的行動に対する敵意を意味するものではなく、そうした行動を適度に制限することや、公共サービスには独特な倫理と行動の規範があるという認識を含むものだった。同様のプロセスにより、徐々に現れつつあった市民の非宗教的国家との関係における軍部と教会の地位も、影響を受けている。政界が軍事力の誇示に頼らない制度構造を発達させるのに伴い、政治と軍部の規範はたがいに分離させる必要があると見られるようになった。文民政治を擁護する者が、この分離や、軍部による政治介入の回避を訴えたからといって、平和主義者であるとはかぎらない。突きつめれば、敬虔なキリスト教徒の政治家が教会と国家の役割は分離しなければならないと主張することも同様可能だった。

一九八〇年代に新自由主義が主導権を握ったことを背景として、いわゆるNPM(新しい公共管理)によって導入された変化に、政府と民間企業の境界を半透性として再定義したことがある。企業は存分に政府に干渉できるが、その逆はできないとされたのだった。



を握るキリスト教と白人性が明確なアイデンティティ、権力、そして国家と西洋の誇りの構成要素となっていたような神話的な過去に訴えるものであった。これは、外国の国民、思想、法律、文化、宗教による侵略に対抗して、右派のポピュリズム指導者たちが守り、回復させることを約束したおとぎ話の世界なのである。政治キャンペーンのスローガンがすべてを物語っている——「アメリカをもう一度偉大な国に」(トランプ)、「フランスをフランス人の手に」(ル・ペンと国民戦線)、「支配権を取り戻そう」(ブレグジット)、「われわれの文化、われわれの祖国、われわれのドイツ」(ドイツのための選択)、「純粋なポーランド、白人のポーランド」(ポーランド法と正義党)、「スウェーデンをスウェーデン人のものに」(スウェーデン民主党)。これらのスローガンとそれが表現する攻撃的な精神は、それまではばらばらであった人種差別の主流逸脱グループ、右派のカトリックやキリスト教福音主義者、そしてミドルクラスや労働者階級から落伍しつつある、たんに不満をかかえた白人の郊外居住者たちを結びつけた。ケーブルテレビからFacebookにいたる、進行するメディア消費のたこぼ化は、こういった結びつきを強化し、中部地域居住者と、教育があり、都市に住んで洗練され、人種が混濁され、フェミニニストであり、クイア・アフターマティヴであり、無神論者である人びととのあいだの分断を広げた。同時に、新自由主義が、たとえば世界についての知にあふれて深い思考を持っているような金銭化できないような存在を容赦なく矮小化していったことは、多くの人びとの高等教育へのアクセスを阻む私営化と手に手を携えた。教養教育から締め出された一世代は、教養教育に対する反感を育てていった。

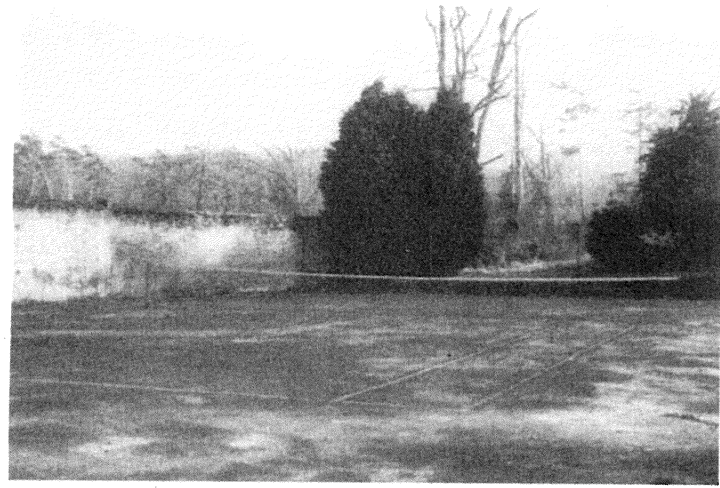
このような物語における強調点はさまざまに異なる。ときには新自由主義政策が強調され、ときには

「新自由主義の廃墟」で「野有」の「新自由主義の未来」
 (人文学院、2022年5月)

はリベラル左派が多文化主義とアイデンティティ・ポリティクスに入れあげたとされるのが強調され、ときには福音主義とキリスト教ナショナリストの政治的重要性と権力の増加が強調され、ときには教育のない人びとが虚偽や陰謀論に騙されやすくなってきていることが強調され、ときにはなかの世界の限界が存在論的に必要であることと、グローバル主義の世界観がエリート以外には本質的に魅力的ではないことが強調され、そしてまたときには旧白人労働者階級のあいかわらずの人種差別主義、もしくはより若い世代の教育のない白人が信じて疑わない新たな人種差別主義が強調される。強力な右派のシンクタンクと政治資金の役割を強調する者もいる。かと思えば国民国家の崩壊、もしくは以前はより(人種的・宗教的に)均質的だった地域の崩壊から生じている新旧の「部落主義」を強調する者もいる。しかし、ほとんどすべての人が同意するのは、グローバル・ノース内部での不平等の新自由主義による激化が火口箱であったなら、グローバル・サウスからグローバル・ノースへの多数の移民はそれに火をつけるマッチだったということである。

さまざまな変化形はありつつも、以上のようなものが、二〇一六年一月の政治的激震以来の、左派の常識であった。この物語はまちがってはいけないけれども、不完全だと私は主張したい。その物語は、この反乱の根源的に非民主主義的な形態を重層決定している諸力を鑑みるものになっておらず、したがってそれを旧いさまざまなファシズムと横並びにしてしまう傾向にある。その物語は新自由主義的な統治性において社会的なものや政治的なものが悪魔化された地位を与えられていること、そしてそれらの代わりに伝統的な道徳や市場が価値を与えられていることを考慮に入れていない。それは、新自由主義の合理性によって社会が瓦解させられ、公共善の信用が貶められたことが、アイデンティ

「セルウィンと名乗った言い回しにも、とうに廃れてしまった礼々しさがあつた。住居の件でおいでになつたのでしよな、と老人はつけくわえた。いま言えるのは、まだ借り手が決まっていないうことだけだ、しかしいずれにせよ妻が戻るまでご辛抱いただくよりほかはない、というのもこの屋敷を所有しているのは妻であつて、自分はただの庭の住人にすぎないのだから。庭の飾りの世捨て人のようなものですよ。このことばが皮切りとなつて私たちは会話をはじめ、広い外の園地と中の庭の境にある鉄柵に沿つて、話しながら歩いていった。とちゆうで少し足を止めた。葦毛のどっしりした馬が三頭、丈の低い榛木の木立を廻つて、芝草を蹴立てながら鼻息荒く走り寄ってくる。馬は待ちかねていたように私たちのそばに整列した。ドクター・セルウィンは、ズボンのポケットから餌を出してあたえ、鼻づらを一頭ずつ手で撫でてやつている。こいつらはお情けで養つているのです、と氏が言つた。去年、ほんのはした金で馬のせり市場で買ったものでしてね。さもなければそのまま屠殺場行きだつたでしょう。ハーシエル、ハンフリー、ヒポリタスといひます。以前どんな暮らしをしていたかはわからないが、買い受けたときはまことに哀れなさまでした。体じゆうダニの巢窟、眼の玉は濁り、蹄は湿地にずっと立つていたものだからすつかりぼろぼろになつていた。ここへ来てからいくらか元氣になつたのです、あと二、三年はいい目を見せてやれるでしょうが、セルウィン氏はそう語ると、いかにも懐いてるといつたふうの馬たちを後にしてまたぶらぶらと歩きだし、ときおり足を止めて細かい説明をくわえながら、庭の奥へとむかつた。小径をとおつて芝地の南側の藪を抜けると、榛の灌木が縁取る散歩道だつた。頭上を覆うように繁つた枝のなかを、灰色の栗鼠がさかんに走り回つている。地表には実をむかれた殻が厚く積もり、乏しい木漏れ



日を浴びたコルチカムが何百と地面に花を開いていたが、木々の葉むらははやくもかさこそと乾いた音を立てていた。榛の径を出たところはテニスコートになつていて、白塗りの煉瓦塀がわきを走つている。テニスにはむかし熱をあげたものでしたとセルウィン氏は語つた。しかしこのコートもめつぼう荒れてしまつた、ここはどこもかしこもみんなそうですが、朽ちかけたヴィクトリア様式の温室と伸び放題の生け垣を指しながら、氏は、長く構わなければ荒ぶのは菜園だけではないのですと続けた。なおざりにされた自然そのものが、人間の課した荷の重みにやがてうめき声をあげ、じわじわと崩れ沈んでいくのが時とともに感じられる、という。大人数を賄うよう造られたこの庭からは、むかしは丹精こめて育てた果物や野菜が年じゆう食卓にのぼつたものだつた。もつとも、こうも荒れるにまかせながらいまだたつぷりと収穫があがつて、年々食の細くなる身にはありあまるほど穫れる。それにもとと手の入つた上等の庭を捨て置

W.G. せいせい小著 庭の記 2020年
「おぼろげな庭の長い物語」(白水社、5月)

の盛衰を以て全国の貧富を量るべし。余は銀行を以て貧富の秤權と為す。また可ならずや。余財有る者は須べからく此の社に托すべし。

今世、金銀は紙に變じ、御脚は羽と化す。之を匣に藏して其の飛行を止むれば、蠹魚之を喰ふの憂へ有り。曾て聞く、淫虫の匣、娘を蝕するを。蠹魚の貨幣を喰ふは、一新以来の新聞。古への富豪は貨幣を窠中に埋め、或いは糠味憎桶の底に藏する者有り。今猶ほ然らば、則ち全楮幣、皆腐敗せん。貨幣の腐敗もまた一新の新聞。

二箇の担商、魚籃を鋤橋（在り）の畔に下し、汗を拭うて小憩す。熊、熊吉なる者、八五郎を顧みて道ふ、「請ふ看よ。為換坐の建築、常に見て常に驚く。

また閑大ならずや。五層の大樓に終ふる者も一生、九尺二間に終ふるもまた一生。蓄ふべきは唯だ財なるのみ。地獄の断獄も財に帰し、極楽の安樂も財に因る。畢竟金、罎を為すの世情なり。一新以来、百物皆換り、百事皆改る。何ぞまた貧富を一平せざる。銀行や為換や、天下の通用金を網獲して、一錢も余輩の手に落ちざらしむ。叱、悪むべし。火を縦つて焼亡するもまた可なり」と。

八道ふ、「縦令一時の富を得るも、三日を出でずして、必ず旧裸虫に復せん。嗜む所の飲酒は禁じ難く、耽る所の花牌は止め難し。時有らば絃歌姉に招か

二 働く人。

三 「おあし」は貨幣の俗称。紙幣となつた所から軽くて飛ぶ羽に喩える。

三 紙魚（蠹）。紙を喰う虫。

四 好色な男の喩え。

五 明治維新以後の新しい出来事。

六 「かねが腐る」は多くの金を死蔵する意味の諺だつたのが、新時代には本当に腐ることもなかりかねないという意。

七 棒手振り。魚類を荷ない売りする行商人。

八 熊さん、八つあん、最も卑賤な人物の通称。

九 間口九尺、奥行き二間の家。貧しい住居の喩え。

三 諺「地獄の沙汰も金次第」。

三 貧富を平等にして差を無くすことをしないのか。

三 すつからかん。

三 花札。江戸期のカルタを變じて、幕末から明治に入って大流行した賭博の一種。

三 小唄や端唄の師匠。下町に多い遊芸の女師匠で売女同然の業態をなす者も多い。

日野龍夫ほか校注の開化風俗誌（山崎波里子）（新日本古本文庫）

東京新繁昌記抄 五編 商会社

大正十一年三月三十一日

二月